

# エックハルトにおける知性認識および その再帰同一構造について

高木保年

## 1 本論考における問題

本論考においては、エックハルトの神認識をめぐる思惟を考察する。具体的には、エックハルトが『パリ討論集』第1問題で神に相応しい名付けとして、「知性認識 (intelligere)」を「存在 (esse)」に優先させていることの意味<sup>1)</sup>を論究する。その際に、神名 ego sum qui sum との関連をとりあげ、エックハルトが神について説明している箇所での実体 (substantia) と関係 (relatio) の定義および観点を踏まえる。また、神と魂の関連においてもエックハルトの名付けの意図を探る。以上の考察から、エックハルトによって神に妥当とされた「知性認識」がどのようなことを意味しているのかを局面ごとに明らかにすることが本論考の目的である。

## 2 知性認識および存在の特徴

『パリ討論集』第1問題では神には「存在」は否認され、神は「知性認識」あるいは「存在の純粋性 (puritas essendi)」であるとされている。

神には存在 (esse) は適合することはなく、神は存在者ではなく、存在者よりもよりいっそう高い或るものである<sup>2)</sup>。

神は知性であり知性認識 (intelligere) であり、その知性認識がその存在の基礎である<sup>3)</sup>。

神においては存在があるのではなく、存在の純粋性 (puritas essendi) がある<sup>4)</sup>。

しかし、「知性認識」と「存在の純粋性」がどのようなことを示すために用いられて

いるのか<sup>5)</sup>は依然として不明である。エックハルトが神に名付けを行う際の意図を明らかにするために、それぞれの名付けを別個に考察する必要がある。

### 3 知性認識と反省

まず「知性認識」の特徴をエックハルトの言葉によって確認しておきたい。

反省 (reflexio) は存在することにおいてあるのではなく、「同じものが同じものと同じである」ということが知性認識に基づいてそれ自身へ (ad se) 戻ってくるように、知性認識することにおいてある<sup>6)</sup>。

さらに、「反省」の特徴が示されているテキストも参照しておく。

sum qui sum と二回言われている反復は […] 存在そのもののそれ自身のうちへの、さらにそれ自身の上への或る種の反省的還帰 (reflexiva conversio) を示しており、さらにそれ自身における滞留ないし固定化を示している<sup>7)</sup>。

上記の引用から、「反省 (reflexio)」と「反省的還帰 (reflexiva conversio)」を同一視することは可能であり、「知性認識」は sum qui sum の「反省的還帰」作用を遂行し、なおかつ表示していることになる。

しかし、神名 ego sum qui sum についてのエックハルトの見解はここまでではいまだ判然としない。そこで、神名における「知性認識」の作用をさらに明らかにするために、神名が「存在の純粋性」と関連付けられている箇所を検証したい。

### 4 存在の純粋性の成立条件

「存在の純粋性」について、まずは先に取り上げた『パリ討論集』の別の箇所を確認しておきたい。

主は自分自身において、存在の純粋性があるのを明らかにしようと欲して、「ego sum qui sum」と語った。主は端的に「ego sum」と言ったのではなく、「qui sum」を付加した。それゆえに、神に存在は一致しない。ただし、あなたがその

ような純粋性を存在と呼ぶ場合を除くが<sup>8)</sup>。

上記引用から理解できるのは、「ego sum」に「qui sum」が付加され、神名が形成されてはじめて、神の「存在の純粋性」の表示が成立するとエックハルトが考えているということである。そして、「存在の純粋性」が ego sum qui sum によって表示されることを理由として、エックハルトは神に「存在」を否認しているのである。ただし、エックハルトが探究しているのは神をどのように表示しうるかだけではない。それは「あなたがそのような純粋性を存在と呼ぶ場合を除く」と言われているとおり、「純粋性」が「存在」という名によって表示されるか否かが重要なのである。そして、神を「存在の純粋性」や「知性認識」と呼ぶことによって、神のどのような側面を理解しているかが問題なのである。

## 5 再帰同一性

ここまでの考察からすると、「知性認識」というのは sum qui sum の作用を表示していることになる。そして、その作用によって成立していると考えられるのが「存在の純粋性」である。「知性認識」および「存在の純粋性」を神に相応しいものと考えるにあたって、エックハルトはそれらに共通の性質を見出していたものと考えられる。その性質とは、①「『同じものが同じものと同じである』ということが知性認識に基づいてそれ自身へ (ad se) 戻ってくる」、②「存在そのもののそれ自身のうちへの、さらにそれ自身の上への或る種の反省的還帰」、③「それ自身における滞留ないし固定化」であった。①および②から「再帰」の作用を、③から「同一」という性質を抽出できるものと考えられる。したがって、神名を介した「知性認識」と「存在の純粋性」に共通の性質を「再帰同一性」と本論考では呼ぶことにする<sup>9)</sup>。エックハルトが神に相応しくないとした「存在」は、この「再帰同一性」という性質の表示を欠いていると考えられる。つまり、神を「存在」と呼ぶことは sum qui sum の「存在そのもののそれ自身のうちへの、さらにそれ自身の上への或る種の反省的還帰」を表示していないことになり、「再帰同一性」の表示を欠くことになるのである。

ところで、「知性認識」が「再帰同一性」を成立させているのは、存在の局面においてのみであろうか。「知性認識」の有する「再帰同一性」は「存在の純粋性」を成立させているだけなのであろうか。

## 6 知性認識と言

上記の問題について、「知性認識」と神名との連関から、今度は「知性認識」と「言」との連関へ観点を移し、「知性認識」のさらなる局面について考察したい。

言 (verbum) はしかし、それ自身のすべてにおいて知性に関係し、そこでは語るものであるか、ないしは語られたものである<sup>10)</sup>。

上記引用から、「言」も「語る (dicere)」も「知性認識」に関係しており、『言』という名称で子が理解されている<sup>11)</sup>と別の箇所でも説明されている以上は、「再帰同一性」をある側面では有しているのではないかと予測される。では、そのような「再帰同一性」はどのようなものでありうるか。それは次のように説明されている。

父は子なくしては存在せず、知性認識もされず、その反対も妥当する。したがって、子は […] 父が父であること (patrem esse patrem) を語りだす<sup>12)</sup>。

「子」は神から生まれた「言」であるから、神を「父」として存在させ、「父」として知性認識されるようにする。「子」は「言」として神から出て、その同じ神を「父」として存在させ、知性認識させるために、再び「言」として、しかし今度は「父が父である」という同一性を示すためにも、作用していると理解できる。神から「子」へ、「子」から再び神へ、しかし「父」としての神へ。この意味において「父」と「子」とは「相関的なもの (correlativa)」<sup>13)</sup>なのである。「言」は再帰的に神を、そして「父」を表示している。そして、「その反対も妥当する」ということは、「父が父である」のみならず「子が子である」という同一性が「言」という観点においては共に成立することを意味する。この同一性は、先に「存在の純粋性」において確認された「再帰同一性」と重なる。しかし、「言」の「再帰同一性」は存在の局面においてだけでなく、認識の局面においても理解される<sup>14)</sup>。ゆえに、「存在の純粋性」や *sum qui sum* にだけでなく、「言」の作用にも、「知性認識」の「再帰同一性」が妥当すると理解してよいだろう。

ところで、エックハルトはなぜ神における「知性認識」にこれほどまでにこだわる

のであろうか。この問題について考察するため、「知性認識」がそれ自体として説明されているテキストを踏まえ、神における「知性認識」と人間におけるそれが接点を持ちうる局面について、次に考察したい。

## 7 それ自体としての知性認識

エックハルトはしばしば、神のものと人間のものを区別していないかのように、「知性認識」をそれ自体として把握しようとしている。

知性認識はそれ自体としては自存するものである。[...] 知性認識はそれ自体としては非被造的なものである<sup>15)</sup>。

この「知性認識」が神のものなのか、人間のものなのか。エックハルトの場合、次に見るように「知性認識」は、それ自体として考えられ、神の「知性認識」と人間のそれとをほとんど区別していない<sup>16)</sup>。さらに、「知性認識」は神に関連付けられて次のように説明されている。

知性認識そのものは、或る種の神の形相性ないし神の形相化 (quaedam deiformitas vel deiformatio) [である]。なぜならば、神そのものは、知性認識そのものであり、存在ではないからである<sup>17)</sup>。

ここで確認しておきたいのは、「神そのもの」が「知性認識そのもの」であるのみならず、「知性認識そのもの」が「或る種の神の形相性ないし形相化 (quaedam deiformitas vel deiformatio)」であるということである<sup>18)</sup>。「神の形相化」は、神が「知性認識」として理解される限りでは、「言」としての「子」によって「父が父である」、あるいは「子が子である」という仕方 で形相化されることであると理解できる。しかし、何のためにエックハルトは「知性認識」をそれ自体として説明するのであろうか。さらに別のテキストも見ることにする。

神が吹き込む知性は、それによってわれわれが神を見るところのものであると同時に、それによって神がわれわれを見るところのものである<sup>19)</sup>。

上記引用から、神における「知性認識」と人間におけるそれが接点を持ちうると理解できる。では、この接点は何のためのものなのか。

知性に向けて上昇すること、知性に従属することが神と合一されることである<sup>20)</sup>。

本論考冒頭で「神は知性であり知性認識である」と確認された神に、知性によって合一されることがエックハルトの意図であると理解される。

しかし、ここで困難な問題が生じる。それは、一方では「子」のみが「言」として理解される限りでは、「子」としての神に与って、人間が「神の子」として神に合一するということは了解される。しかし他方では、神は、後で検証するように、「実体」としても理解される。そのような神にどのように合一するというのであろうか。この問題は、同時に、「知性認識」が「実体」に相当する神を意味しうるのか、「関係」に相当する神を意味しうるのか、あるいはそのどちらでもないのか、ということを問うものでもある。

## 8 神における実体

そもそも、神とは実体 (substantia)<sup>21)</sup>という観点からはどのような神であるのか。このことについてエックハルトの理解が示されているテキストを参照することにする。

神においては […] 実体 (substantia) はその実体の定義においては、それ自身を注ぎ出すものではない。というのは、一方では実体は内部に関わっており、自分自身に関わっており、他のものに関わっていないからであり、また一方では実体はそれ自身にしたがって、かつそれ自身を通して、存在に関わっているものであり、その存在は神的なものにおいて常に一なるものだからである<sup>22)</sup>。

「実体」の観点から神を理解しようとする、神は決して「言」を発しないことになり、神が「それ自身を通して、存在に関わって」おり、その存在が「常に一なるもの」である限り、知性を通した神との合一は不可能であるとも思われる。

本論考では *sum qui sum* の「反省的還帰」作用を「知性認識」が遂行・表示していることは先に見た。ただし、その際に、「端的に純粹な実体 (substantia mera) を

表示する]<sup>23)</sup>ego はいわば「知性認識」の作用・表示からは取り残される形となっていた<sup>24)</sup>。そして、このことは次のようにも説明される。

「私」という語 (li ego) が示している実体をこの世は受容できない<sup>25)</sup>。

しかし、知性においてはこの限りではない。ただ知性のみ (solus intellectus) が「私」という語が示している実体そのものを受容し、それに相応しいものであるとされている<sup>26)</sup>。ここから、「知性認識」と同一視された神とは何なのか<sup>27)</sup>が問われなくてはならない。さもなければ、「私」ないし実体の範疇のみによって把握される神との合一は理解されないことになる。しかし、「私」によって表示されている「純粋な実体」を知性のみが受容すると説明されているからには、神は別の範疇においては「言」を発しているとも考えられるのである。そこで、今度は、神における「関係」という観点から、「知性認識」における神との合一についてのさらなる理解を試みたい。

## 9 神的なものにおける関係

「私」によって表示される「純粋な実体」としての神を知性はどのように受け取るのか。これについて、関係 (relatio) について説明されている箇所を検討してみる。

[関係は] 関係 (relatio) である限りにおいては、存在にも本質にも実体にも関わることはなく、まったくそれと対立するものと [関わる]。それゆえに、神的なものにおいては父の存在と本質の存在とは一のままである<sup>28)</sup>。

上記引用において重要なのは、神的なものにおける限り、ベルソナによる区別は神における「存在」と「本質」と「実体」との区別には関わらないことである。つまり、「父」と「子」とはベルソナが異なるとしても、神としての「存在」と「本質」と「実体」は一つなのである。このように理解すると、「実体」としての神と「関係」としての神は分断されてしまっているかのように把握されうる。しかし、その中間項とも呼ぶべきものがある。それは「生む (generare)」である。

生むという能力 (potentia generandi) は、絶対的に (absolute) 本質なのではなく、関係を伴う本質 (essentia cum relatione) であるということである<sup>29)</sup>。

「本質の存在は一のまま」であるはずが、「生む」ということにおいては「関係を伴う本質」が理解されている。神において「生む」とは、「神は子を生むことによって語る。というのも、子は言だからである。」<sup>30)</sup>と説明されているとおり、「言」の一局面である。また、「出生能力」は次のようにも説明されている。

出生的能力 (potentia generativa) とは二つのものに関係している。それら二つのものとは、一性と区別、正格においては一性と本質であり、斜格においては区別と関係である<sup>31)</sup>。

以上のことから、「生む」とは「実体」としての神を前提としながら、「関係」としての神に接続するための概念装置であると了解される。そして、この「生む」が次のテクストでは「神」においての「始原」と関連付けられている。

父は、本質ないし実体である限りにおいては、言を語ることもなく、子を生み出すこともないのであり、[父がそのようなことをなすのは] 父が始原である限りにおいてである<sup>32)</sup>。

上記引用からすると、「実体」としての神から「関係」としての神への移行は「始原」<sup>33)</sup>における「言」、「出生」によると考えられる。そして、この移行なくしては、「実体」としての神は人間に示されることはないと思われる。

## 10 出生作用における一

それでは、上記の移行を表示することになる「知性認識」の一局面としての「言」と「出生」とはどのようなものであろうか。

言 (verbum) は非ペルソナ的に語られるのであり、言は父がそれによって常に語る場所のものであると同時に、父とともに常に語り、すべてのものに働きか



けるところのものである [...]。語るものにとって能動的に語ることは、言にとって受動的に言われることと同一であって、能動的に生むことと受動的に生まれること (*generatio activa et passiva*)、父と子、父性と子性は同一である<sup>34)</sup>。

上記引用から、「父」と「子」の間には、「言」においてのみならず「出生 (*generatio*)」においても、作用の観点からの「再帰同一性」が成立していると理解される。エックハルトはあくまで、「言」の作用としての「語る」や「出生」の働きとしての「生む」という動作をそれ自体として考察し、それらが意味内実としては同一であると理解している<sup>35)</sup>。さらに、「生む」ということに関しては、ドイツ語説教でも扱われている。

すべての純粹さの満ちる原初の純粹性 (*erste lüsterkeit*) のうちでは一片の木っ端といえども、純粹知性そのものと見えるのである。神の業も同様である。神はその独り子を魂の最も高い部分に生む。神がその独り子を私の内に生むというその同じことにおいて (*in dem selben*)、私はその独り子を父のうちへと生み返す<sup>36)</sup>。

一方では、「同じことにおいて (*in dem selben*)」と言われていることから明らかなように、「生む」という作用において同一性が見出される。また他方では、「生み返す」ということから再帰性が看取される。しかも、「生む」も「生み返す」も「原初の純粹性のうち」ならば「純粹知性そのもの」であると理解される。さらに、再帰性は「父」と「独り子」との間で成立するのみではない。

このひとつの現なる今に (*in einem gegenwertigen nû*) 立つ魂のうちへと父はその独り子を生子、この同じ誕生において魂は再び神のうちに生まれる。これは一つの誕生 (*ein geburt*) である。魂が神のうちで生み返すたびごとに、父はそのつどみずからの独り子を魂のうちに生む<sup>37)</sup>。

上記引用では、「生み返し」が「父」と「独り子」との間でのみならず、「神」と「魂」との間でも成立している。そして、この「生み返し」によって、神との合一が

成立していると理解される。しかも、「神は世界と一切の事物をひとつの現なる今において (in einem gegenwertigen nū) 創造する」<sup>38)</sup>と述べられているのであるから、「ひとつの現なる今」とは「始原」のことであり<sup>39)</sup>、「神」における「父」と「子」との間での「生み返し」が原像的に、そして「神」と「魂」との間でのそれが模像的に成立していると考えられるだろう。

しかし、魂が生み返すというのは具体的にはどのようなことなのか。「父・子」、「生む・生まれる」という関係に着目しつつ、別の観点から捉え直してみると、「義・義人」という関係を見出すことができる。

義人は義人である限りは、その全存在を義からのみ有し、受け取り、したがって義人は本来的な仕方では義から生まれた子であり、義そのものは、そしてそのみが義人を生むのであり、義人を生む父である<sup>40)</sup>。

これについてエックハルトは「義のすべての働きのうちには三位一体の似像と表現が含まれている」<sup>41)</sup>と主張する。すなわち「生まれざる義」と「生まれたる義」両者の働きから義人が生まれるということである。そして、その両者の働きについて次のように述べている。

生まれざる義と生まれたる義は端的にその本性において一なるもの (unum) である<sup>42)</sup>。

ここから、義と義人は本来的には一つの同じ働きをすることが理解できる。すなわち、「義人は、義の子であるから、義を語りだしている」<sup>43)</sup>のであり、「義もまた、義である限りは、義人以外の子も子孫も持たない」<sup>44)</sup>のである。そして、この同じ働きでは、義人が「義への、神そのものへの或る種の同形性 (quaedam conformationes et configurationes ad iustitiam et ad ipsum deum)」<sup>45)</sup>において「再び義に還りゆく (redire ad iustitiam denuo)」<sup>46)</sup>ことが重要なのである。「同形性」は「知性認識そのものは、或る種の神の形相性ないし神の形相化 (quaedam deiformitas vel deiformatio)」であるということ、また「義への帰還」は「父」と「子」、神と魂における「一つの誕生」と重なる。「知性はものをその諸々の始原において捉える」<sup>47)</sup>と説明されていると

おり、知性は受容したものをその始原に遡って認識する。「生まれざる義」を始原において知性認識することがなければ、義人は「義」を知らず、そのような義人は「義」を語りだすこと、すなわち「義人である限りの義人」として存在することもないのである。

義は語ることによって、義化するのであり、義人は義を聴くことによって、義化され、義人として生まれ、義の子になり、自分自身のうちの義ではないすべてのものが取り去られ、溶け去った後に、義のうちへと変容され、義と同じ形になる<sup>48)</sup>。

義が語ること、義人が「義」を聴くことは「言」に関わり、義人として生まれることは「出生」に関わり、そしてこれらすべてのことに加えて、「義」と同じ形になること、すなわち「義化」は「知性認識」の「再帰同一性」に依存していると考えられる。

以上のことから、義と義人は、「生むもの」と「生まれたもの」というペルソナの差異こそあるものの、両者は「本性において一なるもの」である限り、共に「義」を非ペルソナ的に語りだしていると理解される。そして、この語りだしが「独り子を父のうちへと生み返す」という仕方、義人を義の方へと還帰させる、つまり「義化」するのである。このことから、神が「知性認識」によって義人を生み、義人のうちに「義」を生むことと、義人が「知性認識」によって自分自身が義であることの始原としての神に「義」を認識し、「義」において再び生まれること。これら両方がそれ自体としての「知性認識」によって循環的に成立していると考えられ、「知性認識」の特徴としての「再帰同一性」が義人の出生にも看取される。

これに対して、神を「存在」と呼ぶとすると、「神は存在と本質の観点の下では[...] それ自身においては隠されているものであり、生むものでもなければ、生まれたものでもない<sup>49)</sup>」ということになり、「再帰同一性」の表示は隠され、「知性認識」の「再帰同一性」に含まれている「出生」という局面も表示されないことになってしまうのである<sup>50)</sup>。

## 11 結 語

本論考における以上の考察から、エックハルトが「神」に「知性認識」という名付

けを優先させていることが理解された。まず、神名 ego sum qui sum において、「存在の純粹性」として、存在の局面での「再帰同一性」が「知性認識」によって表示されていた。次に、「神」における「言」が「子」として再帰的に「父」の同一性を成立させ、このことによって、認識の局面での「再帰同一性」が「知性認識」によって表示されると確認された。さらに、それ自体としての「知性認識」の考察を経て、「神」の「実体」と「関係」の間における「出生」が「知性認識」の誕生の局面での「再帰同一性」として理解された。そして、エックハルトは「知性認識」という名付けによって、「神」の「非ペルソナ=実体=一」の側面と「ペルソナ=関係=差異」の側面の両方を内包的に名付けていると同時に、「知性認識」の誕生の局面で「神」の「実体」と「関係」という範疇間の移行を動的に、かつ神秘的<sup>51)</sup>に接続しているのである。神を「知性認識」と名付けることによって、エックハルトは神の存在・認識・出生が、「知性認識」によって理解される「再帰同一性」において一であることを示そうとしていたと了解されるのである。

(本論文は、平成 19 年度第 56 回中世哲学会大会における口頭発表をもとに加筆修正したものである。)

## 注

エックハルトの著作からの引用は、*Die deutschen und lateinischen Werke*, hrsg. im Auftrage der Deutschen Forschungsgemeinschaft, Abteilung I & II に拠り、著作あるいは説教略号、節番号を記し、ラテン語著作を LW で、ドイツ語著作を DW で、巻数をローマ数字でそれぞれ示し、その後に頁、行番号を表記した。ただし、ドイツ語著作には節番号は用いられない。著作および説教略号は以下のとおり：

*In Eccl.*     *Sermones et Lectiones super Ecclesiastici cap. 24, 23-31*

*In Ex.*       *Expositio Libri Exodi*

*In Gen. I*    *Expositio Libri Genesis*

*In Gen. II*   *Liber parabolarum Genesis*

*In Ioh.*      *Expositio sancti Evangelii secundum Iohannem*

*In Sap.*      *Expositio Libri Sapientiae*

Q. 1          *Quaestio parisiensis: Utrum in deo sit idem esse et intelligere*

Q. 2          *Quaestio parisiensis: Utrum intelligere angeli, ut dicit actionem, sit suum esse*

Q. 3 *Quaestio Magistri Gonsalvi continens rationes Magistri Eckhardi:  
Utrum laus dei in patria sit nobilior eius dilectione in via*  
Sermo *Lateinischer Sermo*  
Pr. *Deutsche Predigt*

- 1) 神において「知性認識」を「存在」に優先させるというエックハルトの主張は、「前期パリ討論集」（『パリ討論集』第1～3問題）当時のドミニコ会とフランチェスコ会の代表同士における討論（『パリ討論集』第3問題）と無縁ではない。神認識において意志や愛が優位であるという、論敵ゴンサルヴスの主張を、当時、エックハルトは論駁する立場にあったのである。両者の討論の詳細な比較分析を踏まえて「前期パリ討論集」およびそのドイツ語説教との関連については、次の研究がある：Mischa von Perger, „Disputatio in Eckharts frühen Pariser Quästionen und als Predigtmotiv“, in: K. Jacobi (Hg.), *Meister Eckhart: Lebensstationen – Redesituationen*, Berlin 1997, S.115–148.
- 2) Q. 1 n. 12 (LW V, 47, 14–15): deo non convenit esse nec est ens, sed est aliquid altius ente.
- 3) Q. 1 n. 4 (LW V, 40, 6–7): deus est intellectus et intelligere et est ipsum intelligere fundamentum ipsius esse.
- 4) Q. 1 n. 9 (LW V, 45, 10–11): in deo non est esse, sed puritas essendi.
- 5) なお、神に否認された「存在」については Q. 1 n. 8 および Q. 2 n. 7 を参照のこと。
- 6) Q. 3 n. 13 (LW V, 61, 7–9): Reflexio autem non est in essendo, sed in intelligendo, ut »idem eidem idem« secundum intelligere ad se reflectitur.
- 7) *In Ex.* n. 16 (LW II, 21, 7–10): repetitio, quod bis ait: sum qui sum, [...] indicat; rursus ipsius esse quandam in se ipsum et super se ipsum reflexivam conversionem et in se ipso mansionem sive fixationem.
- 8) Q. 1 n. 9 (LW V, 45, 12–15): dominus volens ostendere puritatem essendi esse in se dixit: 'ego sum qui sum'. Non dixit simpliciter 'ego sum', sed addidit: 'qui sum'. Deo ergo non competit esse, nisi talem puritatem voces esse.
- 9) Pierre Gire, *Maître Eckhart et la métaphysique de l'Exode*. Paris 2006, p. 79f. では神名 ego sum qui sum についての解釈がなされている。そこでとりわけ目を引くのは次のような区別である：a) «ego»: position et affirmation du sujet-substance, b) «ego sum»: équation de l'être et de l'essence, c) «Ego sum qui sum»: mouvement de réflexivité qui rapporte l'existence à son sujet d'origine. この分類のうち、3つ目の観点を本論考では重視した。ただし、mouvementではなく action と本論考では理解したい。あるいは l'Acte pur de l'*Ipsum Intelligere* qui revient sur son Essence en affirmant l'identité absolue de «Celui Qui Est」とも解される。この理解については次のものを参照した：Vladimir Lossky, *Théologie négative et Connaissance de Dieu*

chez Maître Eckhart. Paris 1960, p. 173.

- 10) Q. I n. 4 (LW V, 40, 9-10): Verbum autem se toto est ad intellectum et est ibi dicens vel dictum.
- 11) *In Ioh.* n. 82 (LW III, 70, 9): intelligitur, nomine *verbi* filius.
- 12) *In Ioh.* n. 197 (LW III, 166, 12-14): nec est nec intelligitur pater sine filio et e converso, et per consequens filius [...] enarrat patrem esse patrem.
- 13) *In. Ioh.* n. 364 (LW III, 310, 2).
- 14) *In Gen.* II n. 52 を参照。そこで、言は認識・知および外的存在の始原として理解されている。ただし、本論考においては、「再帰同一性」に議論を収斂するため、創造論までは詳細には取り扱わない。
- 15) Q. 3 nn. 10-11 (LW V, 60, 10-11): intelligere in quantum huiusmodi est subsistens. [...] est increabile in quantum huiusmodi.
- 16) エックハルトによる、この「知性認識」の自存性および非被造性における無区別は、「パリ討論集」第 3 問題において、論敵ゴンサルヴスに「被造物の知性認識については真ではない」と批判されている (Q. 3 n. 25)。しかし、エックハルトにとっては、「知性認識」は「或る種の神の形相性ないし神の形相化」なのであって、この考えかたなくしてはドイツ語著作における「魂の根底における神の子の誕生」はありえないであろう。
- 17) Q. 3 n. 9 (LW V, 60, 8-9): ipsum intelligere quaedam deiformitas vel deformatio. quia ipse deus est ipsum intelligere et non est esse.
- 18) Karl Albert, *Meister Eckharts These vom Sein. Untersuchungen zur Metaphysik des Opus tripartitum*. Saarbrücken 1976, S. 92 を参照。ここでは、人間に 2 つの存在様態 (Seinsweise) があることを示している。一方は知性の特性による非被造的な存在様態であり、もう一方は存在の特質による被造的な存在様態である。これについては次のものも参照した: Erik A. Panzig, *Geläzenheit und abegescheidenheit. Eine Einführung in das theologische Denken des Meister Eckhart*. Leipzig 2005, S. 123.
- 19) *In Gen.* I n. 185 (LW I, 328, 14-329, 1): intellectus, quem deus inspirat, est quo deum videmus et quo deus nos videt.
- 20) *Sermo XXIX* n. 304 (LW IV, 270, 4-5): Ascendere igitur ad intellectum, subdi ipsi. est uniri deo.
- 21) エックハルトの「実体」についての思惟を理解するにあたっては次のものを参照した: Udo Kern, „Gottes Sein ist mein Leben“. *Philosophische Brocken bei Meister Eckhart*. Berlin 2003, S. 67-77. ただし、*purum esse* を術語として用いることに対しては本論考では慎重でありたい。
- 22) *In Eccl.* n. 11 (LW II, 240, 10-241, 1): in deo [...] substantia in ratione substantiae non est sui diffusiva, tum quia ad intra respicit, ad se ipsam est, non ad aliud, tum quia secundum se et per se esse respicit, quod est unum semper in divinis.

- 23) *In Eccl.* n. 10 (LW II, 239, 11-12): *li ego [...]* significat [...] *substantiam meram simpliciter.*
- 24) 「知性認識」が *sum qui sum* の「反省的還帰」作用を表示しているのみだとすれば、*ego sum qui sum* における *ego* に「知性認識」は文字通りには対応していないという意味である。
- 25) *In Eccl.* n. 10 (LW II, 240, 1-2): *substantiae ut sic, quam li ego significat, non est capax hic mundus.*
- 26) *In Eccl.* n. 10 (LW II, 239, 11-240, 3).
- 27) 本来的には「何なのか」は神に対して問うことができないはずである。しかし、本論考では、「知性認識」という名付けとそれによって表示されているはずのものから、エックハルトが神についてどのようなことを理解しているのかを問うために、あえて「何なのか」と記すことにする。
- 28) *In Ex.* n. 71 (LW II, 73, 17-74, 2): *in quantum relatio, nec esse nec essentiam respicit nec substantiam, sed se tota oppositum. Propter hoc manet unum esse patris et essentiae in divinis.*
- 29) *In Eccl.* n. 11 (LW II, 241, 2-3): *potentia generandi non est essentia absolute, sed essentia cum relatione.*
- 30) *In Gen.* I n. 7 (LW I, 191, 1): *Loquitur autem filium generando, quia filius est verbum.*
- 31) *In Ioh.* n. 197 (LW III, 167, 3-5): *potentia generativa utrumque concernit, unitatem et distinctionem, unitatem tamen et essentiam in recto, distinctionem et relationem in obliquo.*
- 32) *In Eccl.* n. 12 (LW II, 241, 8-10): *pater enim non dicit verbum nec generat filium, in quantum essentia sive substantia, sed in quantum principium.*
- 33) 始原において、実体としての神から関係としての神への移項が可能になる根拠として、「子自身も始原より生じたものであるというよりむしろ、父と一なる、かつ同一なる始原である」(*Sermo* II, 1 n. 7) とエックハルトによって述べられていることがあげられる。知性認識はそれ自体としては、いわば不断の始原化作用を遂行していると考えられる。
- 34) *In Gen.* II n. 51 (LW I, 518, 13-519, 3): *verbum est, quod loquitur impersonaliter, et pariter ipsum est quo pater loquitur semper et quod cum patre loquitur semper et operatur omnia [...]. Id ipsum dicenti est dicere active quod est verbo dici passive, id ipsum generatio activa et passiva, pater proles, paternitas filiatio.*
- 35) 無論、主体と客体を考慮すれば、能動と受動という区別は厳然としてある。しかし、行為自体、動作自体としては、エックハルトは主客の区別を消去しようとしている。「知性認識」が *intelligere* と不定詞で表示されることもこのことと関係があると思われる。

- る。
- 36) *Pr.* 22 (DW I, 383, 5-8): ez würde ein lüter vernunft in der êrsten lüterkeit, diu dâ ist ein vülle aller lüterkeit. Alsô tuot got: er gebirt sinen einbornen sun in daz hœhste teil der sêle. In dem selben, daz er gebirt sinen eingebornen sun in mich, sô gebir ich in wider in den vater.
- 37) *Pr.* 10 (DW I, 171, 8-11): Diu sêle, diu dâ stât in einem gegenwertigen nû, dâ gebirt der vater in sie sinen eingebornen sun, und in der selben geburt wirt diu sêle wider in got geborn. Daz ist ein geburt, als dicke si widergebom wirt in got, sô gebirt der vater sinen eingebornen sun in sie.
- 38) *Pr.* 10 (DW I, 171, 5-6): Got schepfet die werlt und alliu dinc in einem gegenwertigen nû.
- 39) 次の箇所を参照のこと: *In Gen.* I n. 7 (LW I, 190, 1-2): principium, in quo deus creavit caelum et terram, est primum nunc simplex aeternitatis.
- 40) *In Sap.* n. 64 (LW II, 392, 10-12): iustus, in quantum huiusmodi, totum esse suum habet et accipit a sola iustitia et est proles et filius proprie genitus a iustitia, et ipsa iustitia et sola est parens sive pater generans iustums.
- 41) *In Sap.* n. 64 (LW II, 392, 14-393, 1): in quolibet actu iustitiae sive operatione est imago et expressio trinitatis.
- 42) *In Sap.* n. 65 (LW II, 393, 6): Est enim iustitia ingenita et iustitia genita unum simpliciter in natura.
- 43) *In Ioh.* n. 196 (LW III, 165, 11-12): iustus, quia filius iustitiae, enarrat ipsam.
- 44) *In Ioh.* n. 196 (LW III, 165, 7-8): etiam iustitia, ut iustitia est, non habet filium, sed nec prolem nisi iustum.
- 45) *In Sap.* n. 45 (LW II, 9-10).
- 46) *In Ioh.* n. 172 (LW III, 141, 11-12).
- 47) *In Ioh.* n. 568 (LW III, 495, 8-9): intellectus [...] accipit rem in suis principiis.
- 48) *In Gen.* II n. 147 (LW I, 617, 1-4): Iustitia loquendo iustificat, iustus audiendo iustitiam iustificatur, gignitur iustus, fit filius iustitiae amisso omni quod non iustum est in se ipso et liquefacto, transformatur in iustitiam et conformatur.
- 49) *In Ioh.* n. 567 (LW III, 495, 4-5): deus sub ratione esse et essentiae [...] absconditur in se ipso, nec generans nec genitus.
- 50) ただしエックハルトが「存在」という名を神に全面的に否認しているというわけではない。エックハルトは神を局面ごとに考察しているのであって、「観点変換 (Perspektivenwechsel)」を遂行していると考えられる。エックハルト自身、「名称の変更 (mutatio terminorum)」によって、例えば「神」と「存在」を置き換えることによって、神の遍在が明らかになると述べている (*In Sap.* n. 142)。なお、「観点変換」につ



いては次の文献を参照した: Kurt Ruh, „Meister Eckharts Pariser Quaestiones 1-3 und eine deutsche Predigtsammlung,“ in: *Perspektiven der Philosophie, Neues Jahrbuch* 10 (1984), 307-324.

- 51) 主にドイツ語著作で展開されるエックハルトの神秘思想は、本論考で考察された「知性認識」の「再帰同一性」なくしては「神秘」たりえないだろう。なお、エックハルトのスコラ学者としての側面と神秘思想家としての側面についての研究には次のものがある: Gerhard Krieger, „Mystik und Scholastik. Zur Diskussion um Meister Eckhart im Blick auf seine ›Quaestiones parisienses‹,“ in: *Trierer theologische Zeitschrift* 107 (1998), 123-147.